

高本康子

浄土真宗本願寺派第 22 代宗主大谷光瑞は、宗主としての活動以外にも、さまざまな事業にかかわったことで知られる。中央アジアやインドにおける仏教遺跡の調査、いわゆる「大谷探検隊」の派遣が、その筆頭に挙げられるだろう。更に、1914（大正 3）年の宗主辞任以後は、アジア各地において、農園経営をはじめとする実業を次々と展開する一方で、例えば小磯内閣の顧問を務めるなど、政府当局者に対する助言者でもありつづけた。

大谷光瑞にかかわる諸事象に関する研究は、近年において特に広がりを見せている。最初の注目は、大谷光瑞ではなく、まず大谷探検隊に関係するものであり、大谷探検隊がアジア各地で収集した遺物に対するものであった。その整理と分析が龍谷大学を中心に、戦後まもなく開始されている。1980 年代に入ると、遺物についての検討をより精細に行うために、探検隊の活動そのものに関心が持たれるようになった。その結果 90 年代にかけて、参加した隊員の個人資料を対象とした詳細な調査が試みられ、その成果も逐次発表されていくこととなった。そのような動きの、最初の画期と目すべきものが、大谷探検隊の行動記録である『新西域記』の復刻出版（井草出版、1984 年）であり、そして最大の画期となるものがその 14 年後、大谷光瑞の五十回忌を機に刊行された『東洋史苑』大谷光瑞特集号であったと言える。前者は、持ち帰られた遺物ではなく、探検隊の調査活動そのもの、大谷光瑞という人物の行動そのものに関心が向けられなされた研究の、まとまった成果としては最初のものであった。また後者は、以後議論の中核となっていく論者がここにおいて顔を揃え、彼等の持つキーワードや専門性によって、大谷探検隊研究に加え、大谷光瑞研究においても、研究が広がっていく可能性があることを、具体的に示したものとなった。2000 年代に入って、これらの研究を牽引してきた研究者による成果が、続けて世に出されることとなる。

従って、アジア調査における収集品の整理分析から始まった大谷光瑞関連研究は、まず「大谷探検隊」で、次に「大谷光瑞」で捉え直され、現在の幅を持つに至ったといえるだろう。隊員それぞれの事績から、調査活動そのもの、そして大谷光瑞の生涯、特に「探検隊」以外の光瑞の行動に光が当てられ始めたことによって、現在においては、世界、アジアと近代日本の関係における、新しい一面が浮かび上がりつつあると言える。

本発表はこの点に注目し、大谷光瑞の事績を、「喇嘛教」すなわちチベット仏教とのかかわりを切り口に読み解くことによって、近代の日本にとって、また近代の日本仏教にとって、異文化とはどのような存在であったのか、その一端を明らかにしようとするものである。本発表においては近代日本と「喇嘛教」とのコンタクトを主軸に、大谷光瑞にかかわる諸事象を振り返り、日本の仏教指導者、それも際立った影響力を持った仏教指導者が持った近代性がいかようなものであったのか、考察を試みることにしたい。

〈キーワード〉チベット、アジア、文明